

資料 2-1

科学技術・学術審議会 学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第24回）
令和6年8月22日



課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 の現状について

独立行政法人日本学術振興会
課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業委員会
委員長 盛山 和夫

平成25（2013）年度～

学術分科会の報告を踏まえ、人文学・社会科学の振興を図る上での三つの視点：

- 諸学の密接な連携と総合性
- 学術への要請と社会的貢献
- グローバル化と国際学術空間

を踏まえた先導的な共同研究を支援。

※毎年度、3～6個の課題を設定

領域開拓プログラム

実社会対応プログラム

グローバル展開プログラム

令和3（2021）年度～

未来社会が直面するであろう**諸問題（大きなテーマ＝課題）に係る有意義な応答**を社会に提示することを目指す研究テーマを掲げ、多様な分野の研究者や社会の多様なステークホルダーが参加して、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追求する研究を推進することで、**その解決に資する研究成果の創出**を目指す。

課題

- A 将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方
- B 分断社会の超克
- C 新たな人類社会を形成する価値の創造

学術知共創プログラム

人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて（審議のまとめ）

（平成30年12月14日 学術分科会人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ）

- 人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いに基づく**「大きなテーマ」を設定**し、その中に自然科学も含む分野を超えた研究者が参加し、問いに対する探究を深めていく共創型のプロジェクトを行うことが有効である。
- 「大きなテーマ」の下で提案を募り、その提案を**異分野の研究者が相互に交換・議論**していくための組織体制を整備する必要がある。
- 体制整備においては、研究者間のネットワークを構築したり、**人文学・社会科学と自然科学の双方に精通する人材育成や国際ネットワークのハブとなる**ことを意識した取組が期待されている。

概要

趣旨 (再掲)	未来社会が直面するであろう <u>諸問題（大きなテーマ）に係る有意義な応答</u> を社会に提示することを目指す研究テーマを掲げ、多様な分野の研究者や社会の多様なステークホルダーが参加して、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追求する研究を推進することで、 <u>その解決に資する研究成果の創出</u> を目指す。
研究期間	最大6年間
研究費	総額9,000万円以下
審査の流れ	書面審査→合議審査（ヒアリング対象の選定）→ヒアリング→合議審査（採択研究テーマの決定）
研究評価	研究期間の3年度目に中間評価、最終年度に最終評価を実施 ※2年度目以降で研究評価を実施しない年度においてはフォローアップを実施

応募・審査状況

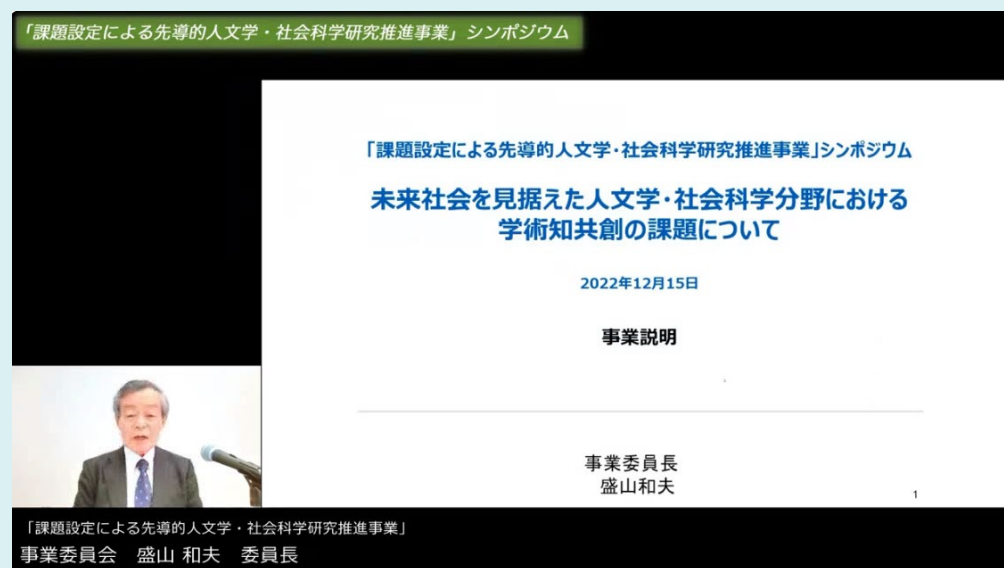
課題	令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度		合計	
	応募	採択	応募	採択	応募	採択	応募	採択	応募	採択
A将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方	12	0	7	0	7	1	6	1	32	2
B分断社会の超克	10	1	10	0	11	3	4	0	35	4
C新たな人類社会を形成する価値の創造	9	1	12	2	10	0	10	1	41	4
合計	31	2	29	2	28	4	20	2	108	10

採択年度	課題	研究テーマ名	研究代表者
令和4年度	C	よりよいスマートWEをめざして：東アジア人文社会知から価値多層社会へ	出口 康夫 京都大学・文学研究科・教授
	C	人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う	中村 靖子 名古屋大学・人文学研究科・教授
令和5年度	A	コロナ危機から視る政策形成過程における専門家のあり方	大竹 文雄 大阪大学・感染症総合教育研究拠点・特任教授
	B	重層的アクターの協調を生み出す気候変動ガバナンスの構築－低炭素水素事業に着目して	石川 知子 名古屋大学・国際開発研究科・教授
	B	偽情報と政治的分断に関する東アジア諸国を中心とした包括的研究	粕谷 祐子 慶應義塾大学・法学部・教授
	B	身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現	床呂 郁哉 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
令和6年度	A	人口動態予測に基づく空間格差の解消に向けたシナリオ	蕭 耕偉郎 東京大学・大学院工学系研究科・准教授
	C	ポストヒューマン社会のための想像学	大澤 博隆 慶應義塾大学・理工学部・准教授

課題：A 将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方、B 分断社会の超克、C 新たな人類社会を形成する価値の創造
各研究テーマの概要：<https://www.jsps.go.jp/j-kadai/gakuzyututi/saitaku/index.html>

シンポジウム

- 令和4年12月15日（木）に「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」シンポジウムをオンラインにて開催。
- 研究者や学生、大学・研究機関の職員、資金配分機関関係者等から168名が参加。



<https://www.youtube.com/watch?v=6gW4fVhjuYU>

「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」シンポジウム

未来社会を見据えた 人文学・社会科学分野における 学術知共創の課題について

本シンポジウムでは、「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」の事業内容の紹介と本事業に採択された研究テーマの活動の発信のほか、研究者や事業に関心のある方との交流の場を創出することを目的としています。また、本事業の「学術知共創プログラム」を深く知っていただくためのパネルディスカッションも開催いたします。

2022. 12.15 Thu 13:30～16:30

参加費 無料 Zoom ウェビナー

オンライン開催 お申し込みは **12.14 Wed** まで

申込み方法 右記URLより必要事項をご記入の上、お申込みください。
<https://online-conference.jp/jsp2022sympo/apply/register>

時間	プログラム	発表者等
13:30-13:35	開会挨拶	杉野 剛 (日本学術振興会・理事長)
13:35-13:40	来賓挨拶	森 見憲 (文部科学省・研究振興局長)
13:40-13:50	事業説明	盛山 和夫 (日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」事業委員会・委員長)
13:50-14:20	基調講演 「プロジェクト型研究の展開と課題」	城山 英明 (東京大学・教授)
14:20-15:05	令和4年度「学術知共創プログラム」採択テーマ研究活動報告 令和元年度「グローバル展開プログラム」採択テーマ研究活動報告	出口 康夫 (京都大学・教授) 「よりよいスマート WE を目指して：東アジア人文社会から価値多層社会へ」 中村 晴子 (名古屋大学・教授) 「人間・社会、自然の未来と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」 河野 俊行 (九州大学・教授) 「文化遺産保護の統合的ガバナンス方法論開発のための国際共同研究」
15:05-15:15	休憩	
15:15-16:20	パネルディスカッション 「未来社会を見据えた人文学・社会科学分野における学術知共創の課題について」	司 会：盛山 和夫 パネリスト：栗 泰弘 (学校法人中部大学・理事、副院長) 小林 博司 (大阪大学・名誉教授) 島田 不二夫 (東京大学・教授) 中村 晴子 (名古屋大学・教授)
16:20-16:25	事前質問事項への回答	盛山 和夫 石橋 和哉 (日本学術振興会・研究事業部研究事業課長)
16:25-16:30	閉会挨拶	水本 哲弥 (日本学術振興会・理事)

JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

独立行政法人
日本学術振興会 研究事業部研究事業課
E-mail: h-s@jps.go.jp TEL: 03-3263-1106, 4645

制度改善

公募における制度改善

- 令和5年度公募より、本事業委託費の活用状況を明確にするため、研究プロジェクトチームの構成を見直し。従来の「分担者」を、委託費の配分を受ける「研究分担者」と委託費の配分を受けない「研究参画者」に整理。

● A 将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方

令和元年版高齢社会白書で紹介されている、国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の将来推計人口」において、我が国の人口は2065年には9千万人を割り、高齢化率は38.4%に達するとされ、経済や社会の諸基盤の安定性に大きな影響が生じることになる。また、国連経済社会局の報告書「世界人口予測（World Population Prospects）2019 年度版」によれば、一部の国と地域における急激な人口増加で、現在約77億人の世界人口が2050年には97億人に達するとされる。この間、天然資源と生態系への更なる圧力の強まりや、世界人口の高齢化なども進行するとされ、これらの事象が、SDGsの目標達成、さらにはそれ以降の持続可能な開発にも大きな影響を与えることが考えられる。

このような我が国及び世界の人口動態を見据えながら、いかにして人間中心で多様性のある持続可能な社会を実現していくか。そうした課題に応えようとする探究を期待する。

● B 分断社会の超克

社会課題解決のためには、多様なステークホルダーの協働による包摂的なアプローチが求められているが、現実には、民意の分断、世代間の分断、階層の分断、宗教や民族による分断など、様々な分断がその協働を阻害している状況がある。

近代的な社会においては、多様な選好から一つの社会的決定を導き出すための民主主義的な方法があり、同時に基本的人権などの概念によって少数者を守ること尊重されてきた。しかし、現在では、一部の国にみられるように、多数派が少数派の権利を脅かすようなことが起こるなど、社会における様々な対立が先鋭化している。また、経済的な格差による階層の分断、パンデミックに対する政策の対立、大国の行動や国際問題をめぐる国内対立などの課題も指摘されている。

こうした分断は今後ますます様々な形で顕在化していくものと考えられるが、いかにして分断の構造を捉え直し、乗り越えていくための道筋を示すことができるか。こうした課題に応えようとする探究を期待する。

● C 新たな人類社会を形成する価値の創造

ポスト冷戦も終わり、世界秩序を新たに模索する動きが続いているが、30年～50年後の世界は、人口動態の変化や気候変動、科学技術の更なる進展等により、日々の生活だけでなく、国家像そのものの変容がもたらされ、地球規模での人類社会の価値の見直しと創造が一層進むものと思われる。

特に19世紀以降急速な発展を遂げてきた科学技術の加速度的な進展によりもたらされる様々な社会環境の変化に対し、いかにして人類が向き合っていくか。また、緊迫した地球環境問題として、例えば地質年代区分である完新世に続く新たな区分として提唱されている人新世

（Anthropocene）という考え方にあるように、人類の活動と地球環境の関係の均衡をいかに保っていくか。これらは、人類社会の価値の見直しと創造を考えるうえで避けられない課題である。

地球的規模の課題への取り組みにおいて、日本の近代化などの経験を省察しながら、学術知は新たな人類社会を形成する価値の創造にいかに関与し、どのような役割を担うことができるか。そうした問いかけに応えようとする探究を期待する。

1) 研究テーマの性格（公募要領注記：本プログラムの特徴であり、最も重視されます。）

- ① 応募内容提案書の内容がプログラムの趣旨及び設定された課題の内容に合致したものであるか。
- ② 課題に関する有意義な応答を社会に提示することを目指したものであるか。
- ③ 人文学・社会科学から自然科学などの多様な分野の研究者や社会の多様なステークホルダーが参加して、人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追究するものであるか。
- ④ 人文学・社会科学を軸として新たな学術知を共創することが期待できるものであるか。

2) 研究内容・方法

- ① 研究内容はパラダイムの革新や創造を目指して取り組んでいるものであるか。
- ② 研究内容は現状の諸課題やそれに対する取組を踏まえながら、解決方策が十分には探究されていない、あるいは問題が顕在化していない30年～50年先の国際社会や我が国社会を見据えた長期的な視座が必要なもので、かつ人文学・社会科学が中心となって取り組むことが適当と考えられるものであるか。
- ③ 研究方法は研究内容を達成するために適切なものであるか。
- ④ 研究計画は人文学・社会科学と自然科学の双方に学術的視野の広がりをもつ人材の育成に寄与することが期待できるものであるか。
- ⑤ 研究成果を適切に公開・普及させる計画は具体的か。
- ⑥ 研究成果及びその普及によって、より広い学術や社会の発展への寄与が期待できるか。
- ⑦ 学術的に高い水準が確保されているか。

3) 研究実施体制

- ① 研究代表者が研究テーマを推進する上で十分な研究能力及び経験を有するとともに、研究実施期間中、継続して研究活動全体に責任を持つことができるか。
- ② 研究プロジェクトチームは、研究テーマを総合的かつ効果的に推進できるまとまりのとれた構成となっているか。
- ③ 専門分野、性別、年齢、国籍、所属機関などに関して多様性をもっているとともに、世代間の協働や国際的な取組にも配慮して構築されているか。
- ④ 研究期間終了後において、研究者間のネットワークの広がりが期待できるものか。
- ⑤ 国際ネットワークのハブとなり、国際的にリードすることが期待できる体制になっているか。

4) その他

- ① 研究遂行のための予算規模が適切であるか。
- ② 研究費の管理を担う、研究代表者の所属する研究機関の事務局の体制が整っているか。

中間評価

(1) 研究の進展状況

- 本事業の趣旨及び当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展しているか。
- 今後の研究推進上、問題となる点はないか。
- 採択時に通知された「審査に係る所見」の内容が適切に反映されているか。
- 学術的に高い水準が確保されているか。

(2) 研究成果及びその発信・普及

- 当初の研究目的に照らして期待された成果をあげているか。(あげつつあるか。)
- 計画にしがたい、研究成果を適切に公開、普及させているか。
- 研究成果及びその普及によって、より広い学術や社会の発展への寄与が期待できるか。

(3) 研究実施体制

- 研究プロジェクトチームは、研究者相互に有機的連携が保たれ、研究が効果的に進められているか。

(4) 委託費の使用

- 委託費は適正かつ効果的に使用されているか。

最終評価

(1) 研究目的の達成度

- 当初の研究目的又はそれと同等以上の研究の進展があったか。
- 学術的に高い水準が確保されたか。
- 人文学・社会科学と自然科学の双方に学術的視野の広がりを有する人材の育成に対し、貢献があったか。

(2) 研究成果及びその発信・普及

- 当初の研究目的に照らして期待された成果をあげたか。
- 研究成果及びその普及によって、より広い学術や社会の発展に対し、貢献があったか。

(3) 委託費の使用

- 委託費は適正かつ効果的に使用されたか。